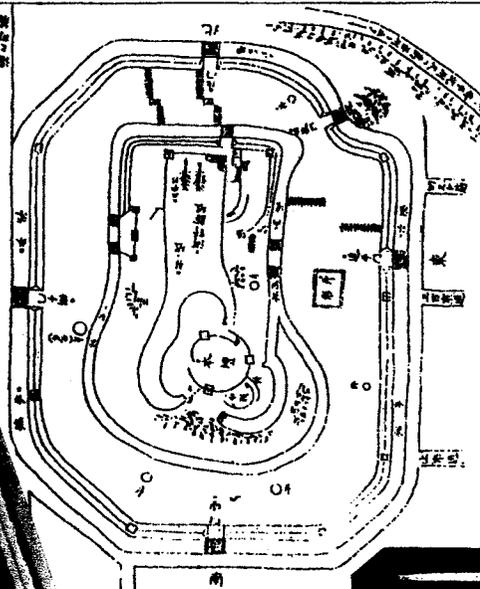


一日三日
めぐり
愛媛



伊予湯築古城址
新田公繁が築いた城跡で、現在は、
 伊予湯築古城址公園として整備されている。



会の探訪史陽備

期 日 平成15年10月18~19日

備陽史探訪の会

期 日 平成15年10月18~19日

スケジュール

福山 — 西瀬戸尾道IC — 来島SA ——— 今治IC
8:00 9:35 8:50

石手寺 湯築城 松山城 考古館 — 松山IC — 内子五十崎IC
11:00 昼食 14:00

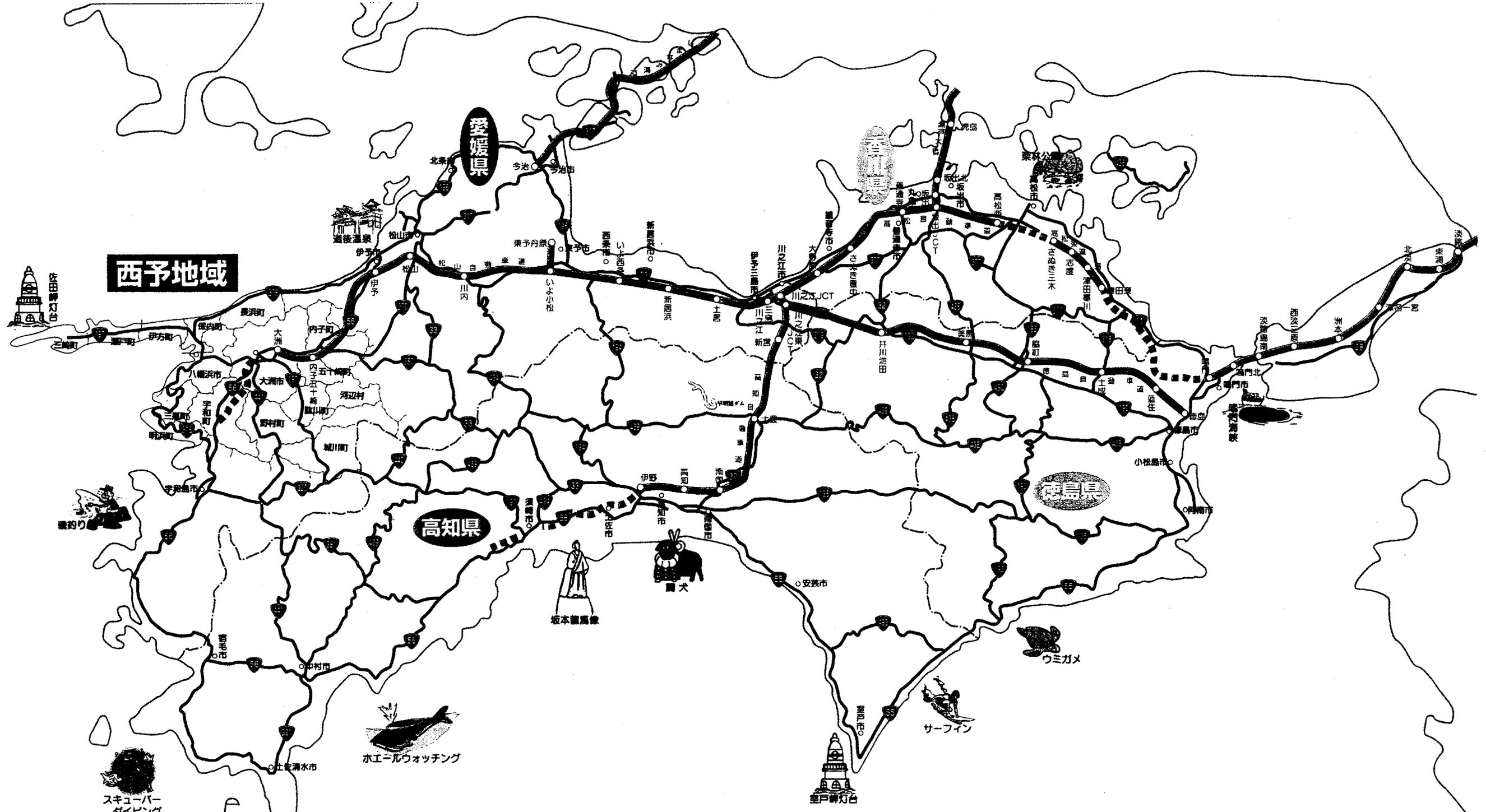
風博物館 — 天神産紙工場 ————— 内子
15:00 16:00 16:15 17:10 17:30

ハイプラザうちこ 喜多郡内子町大字内子丙3の5
0893-44-2245

宿 ——— ??? ——— 内子町並散策 ——— 大洲城(車窓)
8:30 おたのしみ 9:00 11:00

中江藤樹邸跡 — 赤レンガ館 — 砥部焼 — 今治IC
11:30 昼食 13:00 13:50 14:30

来島SA ——— 西瀬戸尾道IC ——— 福山
16:10 16:30 18:00



● 愛媛県西予地域紹介

日本一細長い佐田岬半島を含む、愛媛県西部の豊かな自然や美しい景観に恵まれている地域です。内陸部は四国山地の豊かな森林に囲まれ、県内最大の河川である肱川水系流域に点在する盆地を中心に、市街地や集落が形成されており、宇和盆地は古代、中世を通じ、南予一円の行政や文化の中心として栄え、申議堂や開明学校、高野長英や二宮敬作の足跡など幕末から明治にかけての文化遺産も多く残っています。また、城下町として発展した肱川中流域の大洲盆地は、伊予の小京都とも称される趣を今に伝えているほか、小田川沿いに開けた内山盆地では、木蠟の産地として栄えた内子町の町並みが重要伝統的建造物群として保存されています。沿岸部の八幡浜市や保内町は、古くから海運、紡績、漁業、商業などが栄え四国の西の玄関として、また、開閉橋が水運の名残をとどめる肱川河口の長浜町は、木材、まゆ、和紙などの流域の物資の集積地、水運の拠点として繁栄し、今も随所にその名残をとどめています。また、八幡浜市の座敷雛、五十崎町の大凧合戦、野村町の乙亥相撲、肱川町の大谷文楽、三瓶町の朝日文楽、明浜町の俵津文楽などの伝統的な習俗、行事、芸能、文化が保存・継承されています。



石手寺二王門

石手寺

市内石手。松山駅からバス石手寺前下車
1分
N33°50'40" E132°47'56"

道後温泉の南東、丘陵のふもとにある真言宗豊山派の寺。四国八十八ヶ所霊場の第五一番札所になっている。奈良中期の神亀五年(七二六)、伊予の太守越智玉純が、聖武天皇の勅命によって一字を造立。行基の開眼という薬師如来を祀って安養寺と称した。これが開基とされている。

初め法相宗に属したが、弘仁四年(八三三)、弘法大師空海が留錫して真言宗に改宗。寛平三年(八九二)、熊野十二社を寺内に勧請して六六坊を建立。翌四年、衛門三郎の因縁により、寺名を石手寺と改めたといわれる。

人びとの帰依を集めて寺運は隆盛し、延久

五年(二〇三三)、源頼義が伽藍を修営。永保二年(二〇三三)の夏の干ばつの時に、住持の良覚が雨乞いの祈禱をしたところ、降雨を見たので、白河天皇が良覚に権大僧都の僧位と勅額・宸翰を贈ったことが寺伝に見える。

鎌倉から室町時代には、湯築城主河野氏の信仰が厚く、その援助によって諸堂の修・造営がなされた。永禄九年(一五六六)、災禍によって一二間四方の金堂をはじめ、多くの建物を焼いたが、慶長六年(一六二六)、松山藩主加藤嘉明が、寺領二〇〇石を寄せて再興した。

境内は約六万六〇〇〇平方尺、門前正面に絵馬堂を兼ねた回廊がつづき、みやげ物屋が軒を連ねる。その先に古色をおびた二王門がそびえ、門をくぐると右手に二つの鐘楼、さらに一段高いところに本堂・大師堂・一切経

蔵・護摩堂が建ち、すこし奥に宝物館がある。境内の中ほどに開基灯籠がある。高さ一尺ほどの角柱で、上部に穴があいている。その穴に耳をあてると道後温泉の湯の音が聞こえるという。本堂の正面へ通じる石段の下に、衛門三郎の供養塔が立ち、本堂裏手の山麓には、大師堂の裏側へ抜ける洞窟「都卒天洞」が口を開けている。

寺宝類にも見るべきものが多く、県の指定文化財になっている絹本及毛髪地著色仏涅槃図(鎌倉時代)・木造不動明王及二童子像三体(鎌倉中期)・木造天人面二面(鎌倉末期)・木造獅子頭二面(鎌倉末・南北朝初期)・木造観音菩薩面二四面(鎌倉末・江戸時代)・大壇(室町時代)・札盤(鎌倉末期)・銅三鈴(中国唐時代)などが所蔵されている。うら仏画や仏具は宝物館に並べられており、伝説の「衛門三郎の石」もそこにある。

(宗派) 真言宗豊山派 (山号) 熊野山

(国宝) 二王門

(重文) 本堂 塔婆(三重塔)・鐘楼・阿梨帝母天堂・護摩堂・銅鐘・石造五輪塔

(画) 二王門

三間一戸の楼門で、桁行七・二五尺、梁間四尺、屋根入母屋造り、本瓦葺き。木割りは雄大で、全体の均整がよくとれ、斗組・雲股・虹梁などの各部に鎌倉建築の手法を残している。文保二年(二〇一〇)、河野氏の造立といわれている。

門内左右に置かれている阿・吽二体の木造金剛力士立像も、鎌倉後期のもの。像高は阿像二五三・五

々、呼像二一々。筋骨たくましい堂々たるつくりである。県指定の文化財。

● 本堂

桁行五間(一〇・六五ど)、梁間五間(一〇・三五ど)、一重、屋根入母屋造り、本瓦葺き。四方に縁をめぐらせ、正面一間を引違いの扉戸とし、東側の奥に引違いの板戸を設けて出入口としている。柱はすべて円柱。二王門と同じく鎌倉後期の文保二年(三三〇)の建築といわれている。

● 塔婆

三間(四・八六ど)四方の三重塔で、屋根は本瓦葺き。和様にまとめられているが、斗組の一部に天竺様式が見られる。全体の均整がよくとれ、清楚な印象である。二王門・本堂と同じく、文保二年(三三〇)、河野氏の再建になるもの、といわれている。

● 鐘楼

桁行三間、梁間二間、袴腰を付けた重層で、屋根は入母屋造り、檜皮葺き。柱に銘があり、鎌倉末期の元弘三年(三三三)の建築とほつきりしている。

楼上にかけられた梵鐘も国指定の重要文化財で、建長三年(二五三)、河内国丹治国忠作の銘がある。大きさは高さ一一・一々、直径四五・五だ。

● 護摩堂

桁行三間、梁間三間、一重、屋根宝形造り、檜皮葺き型銅板葺き。こぢんまりとした、和様の簡素な建物で、軒回りにだけ一部唐様が見られる。室町初期(一五世紀前半)の建立と推定されている。

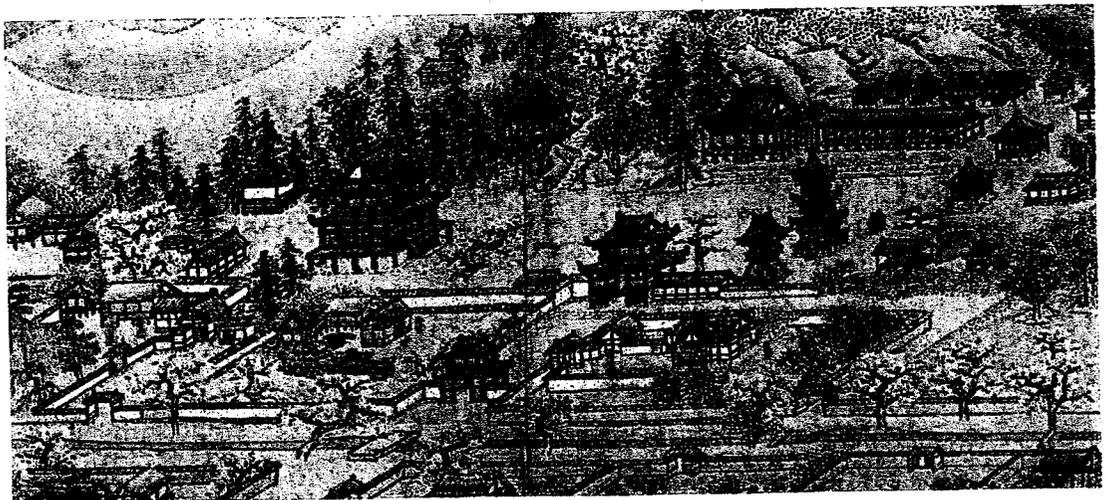
● 阿梨帝母天

境内の東側奥にある。阿梨帝母(鬼子母神)を祀っている。桁行一間(一ど)、梁間一間(向拝とも一・二ど)、屋根檜皮葺き。いわゆる一間社流造りの小祠だが、妻飾り・斗組・墓股などに優れた技法が見られる。鎌倉後期の創建と推定されている。

また阿梨帝母は子供を守護する仏天とされ、産婦がこの石をもち帰って安産を祈り、無事出産できれば、石を二つにして返すという風習がある。堂の前に小石の山ができています。

● 衛門三郎の伝説

昔、伊予国の強欲非道な三郎が、屋敷の前に立った旅僧を邪険にすると、八日のあいだに次々と八人の子どもが死に絶えた。その旅僧が弘法大師であったことに気づいた三郎は持てるものすべてを貧しい人に分け与え、大師の後を追って遍路の旅に出た。ようやく大師に巡り合えた三郎は、今までの罪を詫言び、来世は国司の家に生まれたいと言いついで息を引き取った。大師は道端の小石に衛門三郎再来としるし、左手に握らせた。翌年、領主河野左衛門之助息利の家に左の掌を固く握った男の子が生まれ、安養寺の住職が祈禱すると、やつと掌をひらき、小石が転がり落ちた。小石には衛門三郎再来と書かれてあり、今も石手寺の寺宝として保存されている。



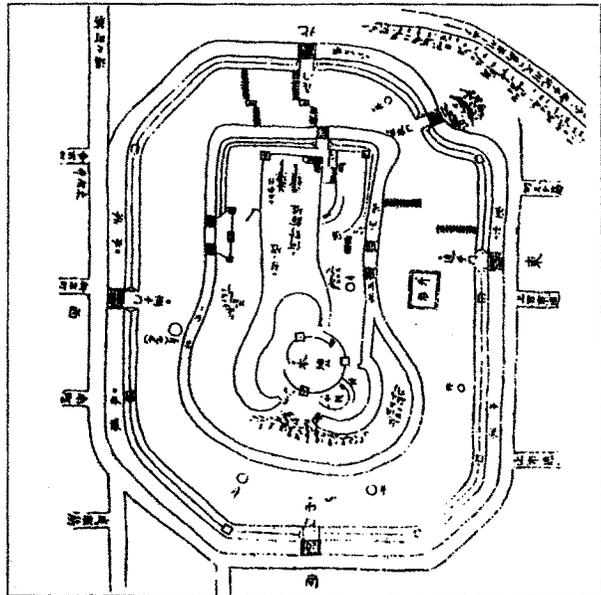
石手寺往古図(石手寺蔵)

道後公園は、中世伊予国(現在の愛媛県)の守護河野氏の居城として約250年間存続した湯築城跡です。

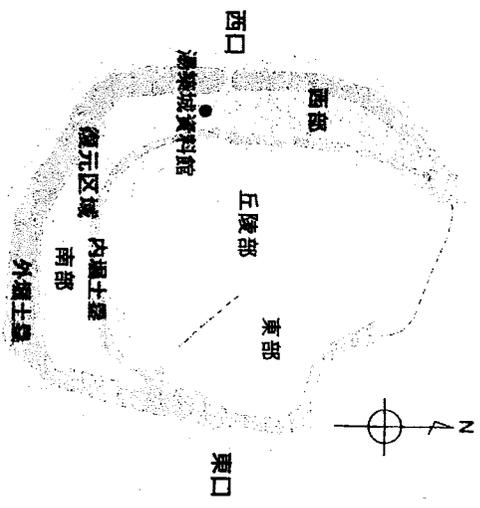
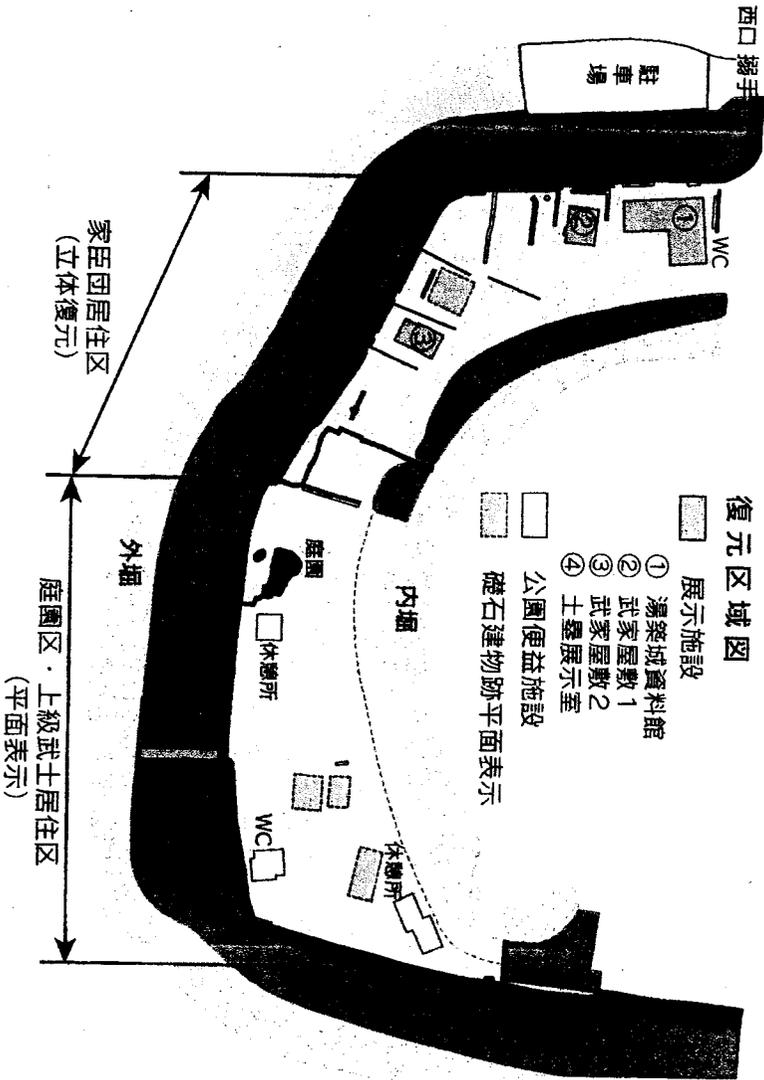
湯築城は南北朝時代の始め頃(14世紀前半)、河野通盛によって築かれたといわれています。通盛の祖先には、12世紀末の源平合戦の際、水軍を率いて活躍した通信、13世紀後半の蒙古襲来の際活躍した通有がいます。通盛は、それまでの河野氏の拠点であった風早郡河野郷(現在の北条市)からこの道後の地に移りました。築城に関する文献は残っていませんが、河野郷の居館が寺(善応寺)になった時期や、忽那家文書の記述などから遅くとも建武年間(1334~1338年)には築城されたと推定されています。

細川氏との戦いに敗れ、湯築城は一時占領されていた時期がありましたが、守護職とともに湯築城を奪い返し戦国末期まで伊予国守護としてその地位を受け継いでいきました。近隣諸国から幾度となく攻撃を受けたり、お家騒動(惣領職の継承をめぐる分裂)や内紛(家臣の反乱)を繰り返しその地位は決して安泰ではありませんでした。

天正13年(1585年)全国統一を目指す羽柴(豊臣)秀吉の命を受けた小早川隆景に湯築城は包囲され、通直は降伏し、やがて湯築城は廃城となりました。



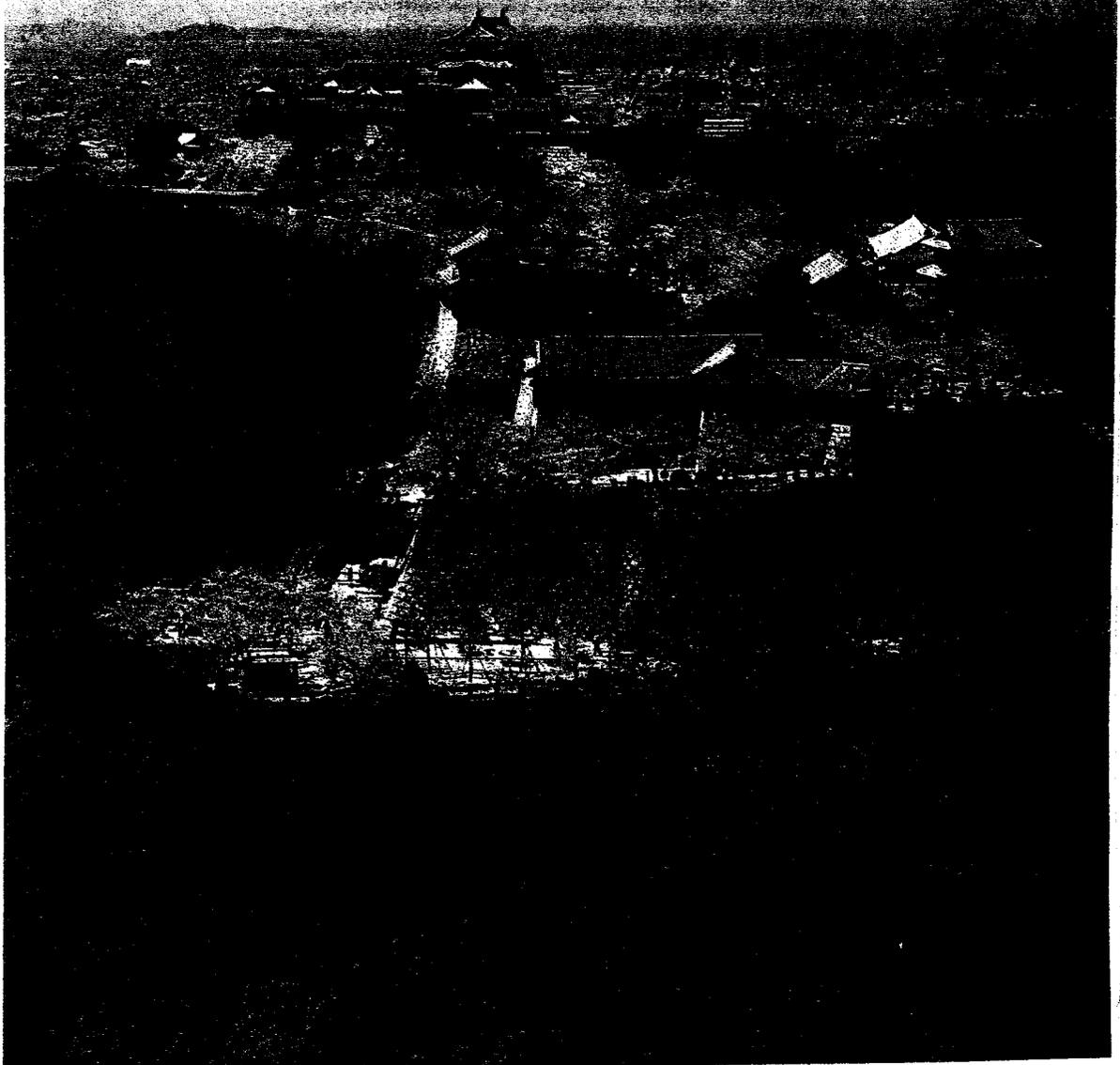
伊予湯築古城之図(『伊予史談』1巻2号所収)



公園の南部では発掘調査の結果をもとに建物や土堀、排水溝、池などを復元し、実物の遺構は保護のため砂で埋め戻しています。

重要文化財

松山城



松山城の沿革

松山城の創設者は加藤嘉明である。嘉明は永禄6年(1563)に三河国(愛知県)永良郷加賀村に生まれた。父広明は徳川譜代の武士であったが、嘉明が6才の時に美濃国(岐阜県)で逝去する。やがて羽柴秀吉に見出されてその家臣となり、20才の時に賤ヶ岳の合戦において七本槍の一人として武勲をたてた。その後従五位下左馬介に補せられ、伊予国正木(伊予郡松前町)6万石の城主に封じられ、また文禄(1592)・慶長(1597)の役には九鬼・脇坂らの諸将とともに水軍を率いて活躍し、その功によって10万石に増加される。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいては徳川家康側に従軍し、その戦功を認められて20万石となった。そこで嘉明は同7年に道後平野の中核部にある勝山に城郭を築くため、普請奉行に足立重信を命じて地割を行ない工事に着手し、翌8年(1603)10月に嘉明は居を新城下に移し、初めて松山という名称が公にされた。その後も工事は継続され、24年後寛永4年(1627)になってようやく完成をみた。当時の天守閣は五層で偉観を誇った。しかし嘉明は松山にあること25年、寛永4年(1627)に会津へ転封される。

そのあとへ蒲生氏郷の孫忠知が出羽国(山形県)上の山城から入国し、二ノ丸の造業を完成したが、寛永11年8月参勤交代の途中、在城7年目に京都で病没し、嗣子がいないので断絶する。

その後寛永12年(1635)7月伊勢国(三重県)桑名城主松平定行が松山藩主15万石に封じられて以来、14代世襲して明治維新に至った。

なお天守閣は寛永19年(1642)に三層に改築されたが、天明4年(1784)元旦に落雷で焼失したので、文政3年(1820)から再建工事に着手し、35年の歳月を経て安政元年(1854)に復興した。これが現在の天守閣である。

その後、昭和に入り小天守閣やその他の櫓が放火や戦災などのため焼失したが、昭和41年から全国にも例を見ない総木造による復元が進められており、昔の姿によみがえる日も近い。

松山城は、海拔132mの勝山山頂に本丸を置き、中腹に二ノ丸・山麓に三ノ丸(堀の内)を置く広大な規模を持つ、姫路城・和歌山城と並ぶ典型的な連立式平山城である。

●築城工事の逸話

築城に際し、まず本丸の位置が決定され、石塁の完成に全力が集中された。この時使用された石材は、付近の産地から産出したものも少なくなかったが、すでに廃城となっていた湯築城および正木城から運搬されたものも多かった。この運搬に際して次のような逸話がある。正木地域から魚類を行商する婦人をおたたと呼んだ。このおただが、嘉明の命を受け小砂を入れた桶を頭に乘せて正木から松山へ持ち運んだ。このために、その桶を御料桶と称するようになり、また嘉明の夫人が糺飯を配り人々の労をねぎらったという。

その後、工事が進み瓦を山上に運ぶ頃、工事が滞滞したため、足立重信は近郷の農民を動員して三方から人垣を作らせ、手ぐり渡しにして一夜の間にその全部を運ばせ、嘉明を驚かせたと伝えられる。

●明治維新と松山城

松山藩は松平家の入部により親藩大名となった。したがって幕末においては幕府側として「禁門の変」や「長州征伐」に参加したため明治維新では朝敵として追討を受けることになる。当時松山藩内においては、朝廷に罪を謝すべしとする恭順論者と、薩・長藩と徹底的に戦うべしとする主戦論者が対立したが、藩主松平定昭は恭順論を入れ、ここに松山藩は朝廷に対し王命に敵対する心腹のないことを明らかにし、新政府側の土佐藩の兵を城下に入れ、藩主が常信寺において謹慎することとなった。これにより松山藩の誠意は新政府の認めるところとなり追討は免れる。このため松山城は戦火にさらされることなく、無事その姿をとどめた。その後、廃藩置県により松山城は兵部省の管轄となったが、城郭廃止の令により大蔵省の所管となり、やがて大正12年、旧藩主久松定謨氏より松山市に寄贈を受けたものである。

松山城年表

西暦	城主名	在城年数	開城年(西暦)	備 考
1603	加藤 嘉明	20	慶長8年(2)	慶長6年築城許可翌年着工し同8年正木城より移る。天守閣五層寛永4年会津40万石に転封
1627	蒲生 忠知	24	寛永4年(7)	蒲生氏郷の孫。出羽上の山より移封。二ノ丸完成 寛永11年逝去、嗣子なく断絶
1635	松平 定行	15	寛永12年(2)	寛永12年伊勢桑名より転封、徳川家康の異父同母弟松平定勝の子寛永19年天守閣を三層に改築
1658	同 定頼	同	万治元年(5)	
1662	同 定長	同	寛文2年(3)	
1674	同 定直	同	延宝2年(7)	今治藩主松平定時の子、延宝2年就封
1720	同 定英	同	享保5年(4)	
1733	同 定喬	同	享保18年(3)	
1763	同 定功	同	宝暦13年(3)	
1765	同 定静	同	明和2年(5)	
1779	同 定国	同	安永8年(2)	天明4年天守閣落雷で焼失
1804	同 定則	同	文化元年(6)	
1809	同 定通	同	文化6年(7)	文政3年天守閣再建工事ににかかる
1835	同 勝善	同	天保6年(2)	安政元年天守閣再建なる(現存)
1856	同 勝成	同	安政3年(3)	
1867	同 定昭	同	慶応3年(1)	
1868	同 勝成(再建)	同	明治1年(2)	松平姓を返上し旧姓の久松となる
1869			明治2年	版籍奉還明治3年三ノ丸全焼、同5年二ノ丸焼失
1923			大正12年	久松定謨伯より城郭を寄贈され松山市の所有となる
1933			昭和8年	小天守閣、南北隅櫓、多間櫓放火のため焼失
1945			昭和20年	乾門など戦災のため焼失
1958			昭和33年	馬具櫓を鉄筋で復興
1968			昭和43年	小天守閣、南北隅櫓、多間櫓、十間廊下を木造で復興
1971			昭和46年	筒井門を木造で復興
1972			昭和47年	太鼓門を木造で復興
1973			昭和48年	太鼓櫓を木造で復興
1979			昭和54年	天神櫓を木造で復興
1982			昭和57年	乾門同東統櫓を木造で復興
1984			昭和59年	良門同東統櫓を木造で復興
1986			昭和61年	巽櫓を木造で復興
1990			平成2年	太鼓門西壁を復興

●お問い合わせ

松山市観光振興課・松山市観光協会

☎790-8571 松山市二番町4-7-2 ☎089-948-6555~8

松山城山索道事務所 ☎089-921-4873

松山城管理事務所 ☎089-921-2540

JR松山駅観光案内所 ☎089-931-3914

道後観光案内所 ☎089-921-3708

春や昔十五万石の城下瓜子規

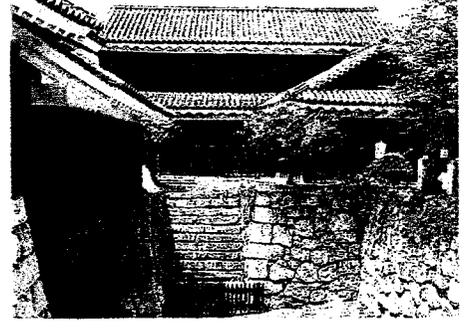


▲天守閣(重要文化財)と小天守閣
 天守閣は三重三層地下一階付の建築で、日本の天守閣で最も後期に再建されたものである。この建築の技工は使用されている材料とも超一流の建造物である。
 小天守閣は、大手(追手)方面を防衛し、からめ手方面を側防し、二ノ丸・三ノ丸方面を監視することのできる位置にあり、城内の諸櫓の中で天守閣について重要な櫓であるのでこの名がある。小天守閣の大棟には両端に瓦の鯉が覆かれ、城郭建築の威厳を示している。



▲乾門同東統櫓
 この門、櫓は慶長年間正木城から移建されたといわれ、松山城搦手の中で、最も重要な構えである。

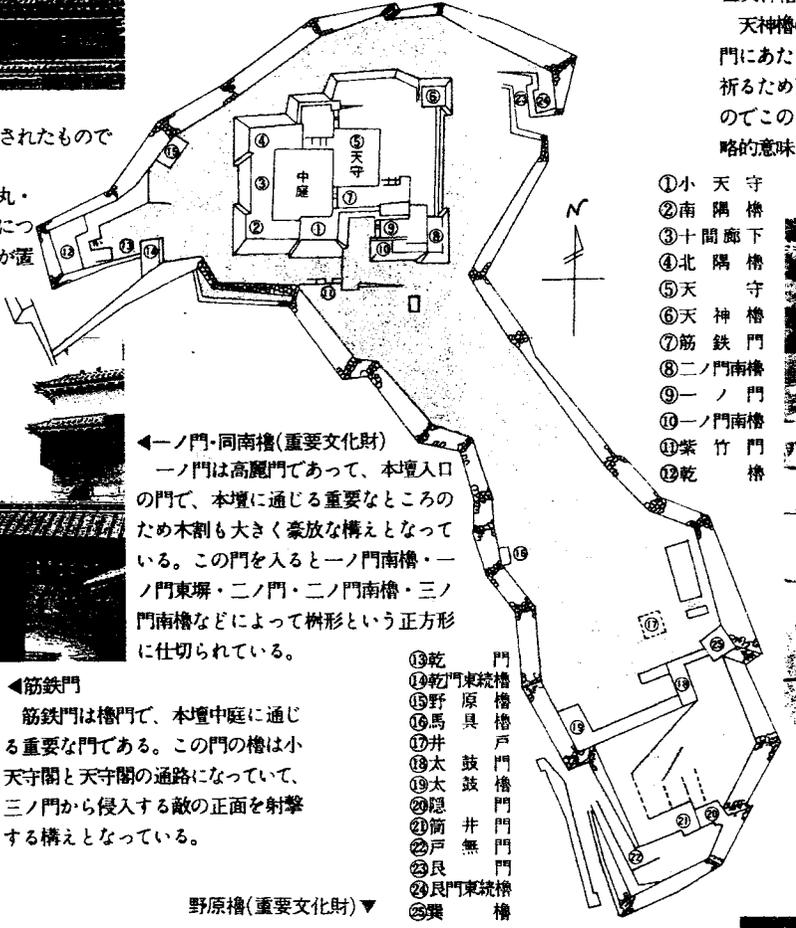
▼乾櫓(重要文化財)
 乾櫓は二重の隅櫓であって、本丸の西北隅すなわち乾の隅に建っている。北郭に通ずる乾一ノ門、乾門、同東統櫓とともにからめ手を防衛する重要な構えである。正木城から移建されたと伝えられる。



▲紫竹門(重要文化財)
 本壇に接して紫竹門および続塀がある。この門と続塀によって本丸の大手とからめ手を大きく仕切ったところで、からめ手を堅める重要な構えである。



◀十間廊下
 十間廊下は天守閣の西側にあるからめ手、乾門方面を防衛する重要な櫓であって、北隅櫓と南隅櫓を連結する通路でもある。桁行が10間であることからこの名がある。



◀一ノ門・同南櫓(重要文化財)
 一ノ門は高麗門であって、本壇入口の門で、本壇に通じる重要なところのため木割も大きく豪放な構えとなっている。この門を入ると一ノ門南櫓・一ノ門東塀・二ノ門・二ノ門南櫓・三ノ門南櫓などによって樹形という正方形に仕切られている。

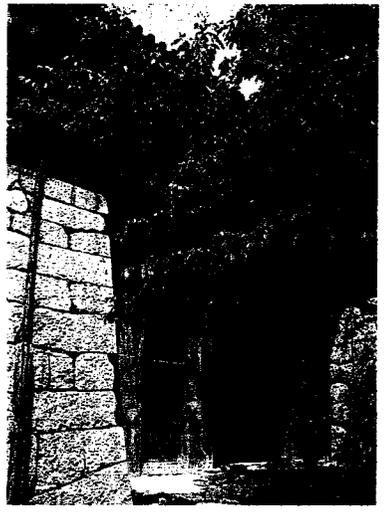
◀筋鉄門
 筋鉄門は櫓門で、本壇中庭に通じる重要な門である。この門の櫓は小天守閣と天守閣の通路になっていて、三ノ門から侵入する敵の正面を射撃する構えとなっている。

▼野原櫓(重要文化財)
 野原櫓は乾櫓と本丸西北を防備するとともに、その東にあった小筒櫓(跡)と本丸の北側を防衛する重要な櫓である。



▲天神櫓
 天神櫓のある本壇、東北の隅は鬼門にあたることから、城の安泰を祈るため天神(菅原道真)を祭ったのでこの名がある。本壇において戦略的意味の少ない珍しい櫓である。

- ①小天守
- ②南隅櫓
- ③十間廊下
- ④北隅櫓
- ⑤天守
- ⑥天神櫓
- ⑦筋鉄門
- ⑧二ノ門南櫓
- ⑨一ノ門
- ⑩一ノ門南櫓
- ⑪紫竹門
- ⑫乾櫓
- ⑬乾門東統櫓
- ⑭野原櫓
- ⑮馬具
- ⑯井
- ⑰太鼓
- ⑱隠井
- ⑲戸無
- ⑳良門東統櫓
- ㉑巽



◀太鼓門 ▼太鼓櫓
 太鼓門・同統櫓・太鼓櫓・巽櫓は1つの防御単位を構成し、高さ6.9mの石垣の上に一線に構築され、筒井門からさらに侵入してくる敵に対し厳しい構えをみせている。また石垣の西端には太鼓櫓があり、太鼓門との間に24.41mの渡塀があって鉄砲狭間16ヵ所、石落3ヵ所が設けられていた。

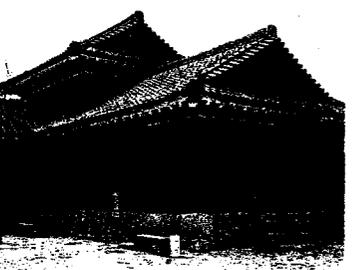
◀良門・同東統櫓
 本壇の東にあたり、この方面の防備を担当すると共に、虎口として寄手が長者が平から揚木戸門に、あるいは、また搦手の乾門方面に迫った時、この門から出撃して寄手の側面をつく戦法を考慮していたものである。



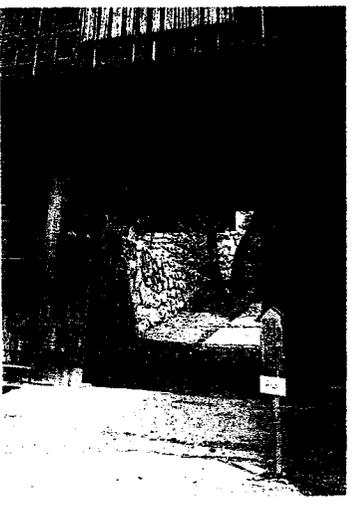
▲隠門(重要文化財)
 この門は筒井門が移建されてのち建築されたもので、戸無門から筒井門に迫る敵の側背を不意襲撃する構えとなっている。この門と同統櫓は筒井門の脇門であり、規模が小さいけれども木割大きく豪放な構えは築城当時の面影を見ることが出来る。また外部下見板張りや、窓が格子窓で突揚げ板戸となっていることなど古い城郭建築の様子を伝えている。

筒井門▶
 この門は築城の際、正木城にあったものを移建されたと伝えられる。本丸大手の正面の固めを構成する重要な門である。

◀戸無門(重要文化財)
 この門は建築様式から見ると高麗門であるが、昔から戸がないので戸無門という。この門と筒井門、隠門とに仕切られた所は二ノ丸・三ノ丸から本丸へ、また東郭から通ずる本丸大手の正門の固めであって、城中最も重要かつ堅固な所である。



▲井戸
 南北2つの峰を埋立てて本丸の敷地を作った際、この地にあった泉を井戸として残したとい伝えられる。井戸の直径2m、深さ44.2mで城郭の飲料水として使用されていた。



【大風合戦の歴史】 起源は古く、鎌倉時代の頃には、時を定めず大空に凧をあげ、風に乗ってブルブルと鳴る糸のスリルを楽しむ単なる娯楽として親しまれていた。藩政の頃になって、毎年旧暦5月5日に武者絵の幟や鯉幟を立てるとともに、小田川をはさんで一族郎党が凧をあげ、男子出生の初節句を祝う行事が行われるようになり、やがて、風のいたずらによる両者の凧のもつれあいをきっかけに空中凧合戦が始まった。明治時代には、五十崎町と天神村との対抗凧合戦にまで発展し、男児の名前や屋号の頭文字、商号などが五十崎独特の凧文字で彩色された凧が、小田川の両側からあげられ、数百に及ぶ大凧が空を乱舞する壮大な絵巻が繰り広げられた。

大風合戦は当町最大の伝統行事として、さらに大正、昭和へと伝承され、戦争による、一時的な中断があったものの、昭和34年から公民館、商工会の共催行事として復興、実施日が旧暦5月5日から新暦5月5日(子供の日)に変更された。昭和41年には、県の文化財指定を受け、同年に発足した、五十崎町観光協会の主催事業として毎年盛大に開催され、今日に至っている。



●出世凧

初節句を迎える町内の出生児の幸福を記念して神事を行い、菖蒲・お守り等を渡し、記念撮影後、子供の名前を書いた男凧・女凧(出世凧=3×4m)をあげて将来を祝福するもので、全国でも珍しい行事である。

五十崎凧博物館

IKAZAKI KITE MUSEUM

和紙と凧の町、五十崎を象徴する「五十崎凧博物館」は、公営としては日本初の

「凧博物館」です。日本各地の凧はもちろん、世界中から収集した凧の展示を中心に、凧に関する幅広い資料の充実を図っています。

凧の歴史や、形態・色彩等によって各国各様の文化や民俗性に触れてみてはいかがでしょうか？



観覧利用案内

■開館時間／9:00～16:30

■休館日／(1)毎週月曜日(祝日にあたる日を除く)
(2)祝日の翌日
(3)12月29日～1月2日

見学申込／☎0893(44)5200

■入館料

	一般	児童・生徒	備考
普通	300円	150円	小学生から高校生までを児童・生徒とする。
団体	250円	100円	20人以上を団体とする。

※特別展示の場合はその都度、定める。

戦の里

大凧合戦

INATION
KITE



凧踊り

凧合戦にちなんだ全国的にも珍しい踊りで、空中での凧の動きを表現したもの。町内の若衆が中心となり、婦人や子供達も加わって踊る、ユーモラスで楽しい踊りである。

子供凧合戦

中学校の男子全員が参加し、手作りの凧で大人顔負けの迫力で展開する凧合戦。



大凧出世太鼓

凧の町、五十崎にふさわしい新しい郷土芸能。さまざまな催して、勇壮華麗なばちさばきを披露し、人気を呼んでいる。

観光凧あげ

凧合戦のだいご味を少しでも多くの人に体験してもらえよう貸凧を準備。ブルブルとうなる凧糸のズリルが満喫できる。

■料 金 / 1セット300円(凧・糸・手袋)

■申込先 / 町観光協会 TEL. 0893(44)2121

内子町は、江戸後期から明治時代にかけて、和紙と木蠟^{もくろう}で栄えた町です。その当時の面影を残す八日市・護国地区の町並みは、今も美しい佇まいを見せ、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。町では、現在、町並み保存運動に続く村並保存運動を展開し、21世紀に向けての新しいエコロジータウンを目指しています。



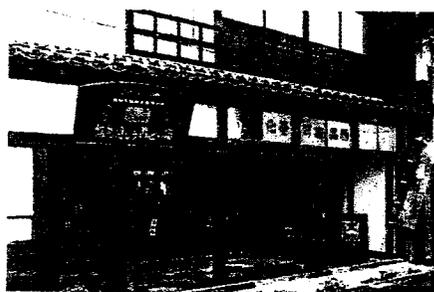
うちこぞ
内子座

大正5（1916）年に大正天皇の御大典を記念し、町内の有志により株式会社として創建された本格的な歌舞伎劇場です。太鼓槽、榊席、回り舞台、花道など、当時そのままの姿を昭和60（1985）年に復元しました。現在、内子町の代表的な文化財として、また、芝居はもちろん様々な催し物が打たれる現役の劇場として町民に愛され、利用されています。（有料）



まちや
町家資料館

寛政5（1793）年の建築で、当時の典型的な町家（商家）を、昭和62（1987）年に修理復元したもので、江戸時代の建築の特徴を最もよく残している建物です。（無料）



商いと暮らし博物館(内子町歴史民俗資料館)

江戸後期から明治期の商家をそのまま利用し、大正10（1921）年頃の商家（薬屋）の暮らしを人形と当時の道具類を使って再現しており、店先では「おいでなはい」と人形の番頭のあいさつに驚きます。併せて、内子町の歴史や民俗、郷土の生んだ人物について、模型、映像などを用いて説明しています。（有料）



もくろろ かみはがてい
木蠟資料館上芳我邸

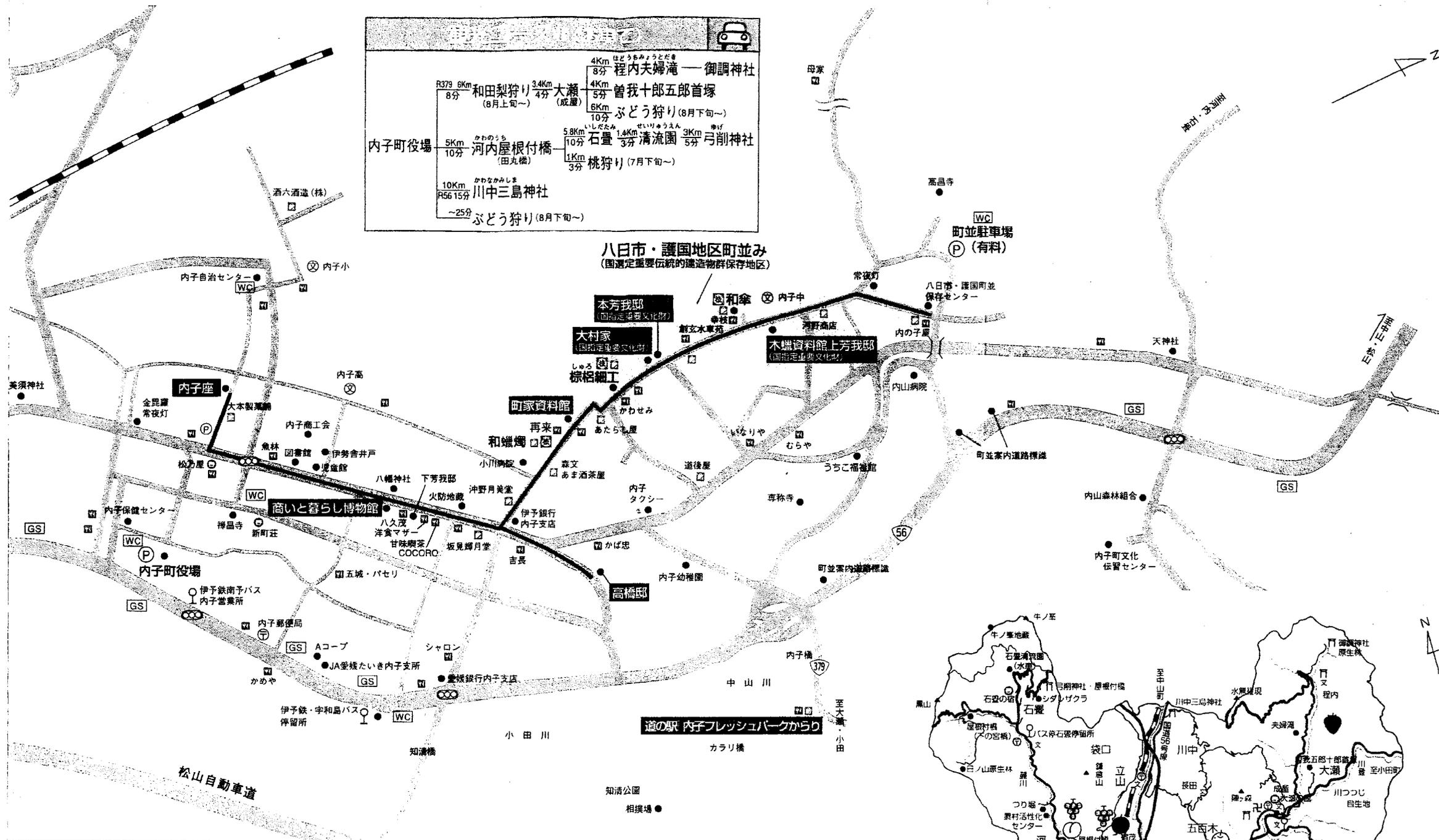
蠟商、本芳我家の分家の一つで、明治27（1894）年の建物です。晒蠟生産で財をなした商家で、豪商の暮らしぶりや木蠟（晒蠟）生産の様子が見学できます。敷地内の展示棟では、木蠟（晒蠟）生産の様子などが、模型、映像などを用い分かりやすく展示されています。この建物は、平成2（1990）年に国の重要文化財に、平成3（1991）年には、製蠟用具が国の重要有形民俗文化財に指定されています。（有料）



文化交流ヴィラ「高橋邸」

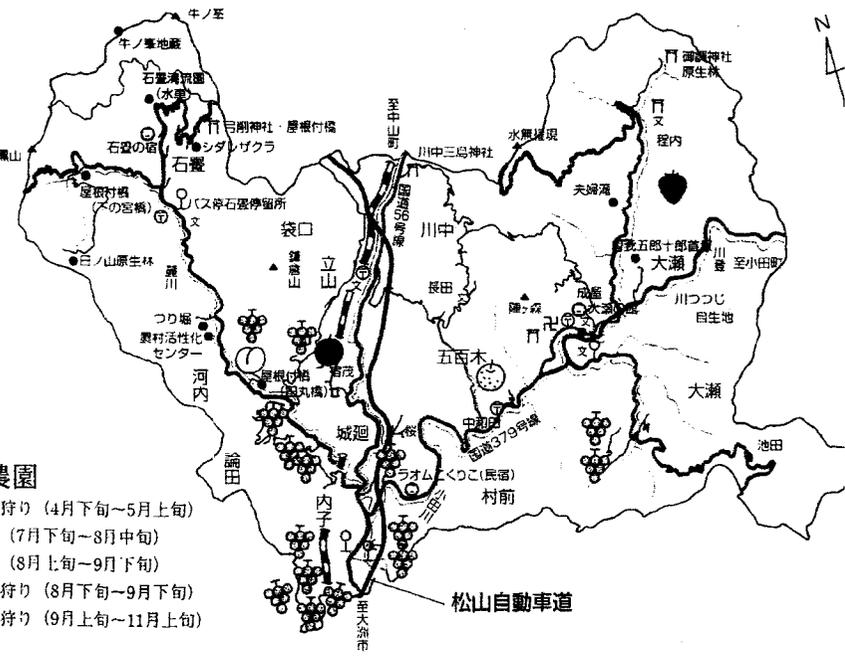
天正の時代にさかのぼる古い歴史を持つ高橋家は、日本の麦酒業界の繁栄に貢献し、戦後の経済復興に通産大臣として大きな業績を残した高橋龍太郎翁の生家です。長男故高橋吉隆氏（元アサヒビール株式会社社長）のご遺族によって平成5（1993）年に内子町へ寄贈されました。茶道、華道、琴などの文化活動に利用できる他、とっておきのくつろぎ空間として町の女性グループが中心になって運営しています。
※毎週火曜日は休館。

4Km 8分	程内夫婦滝	御調神社
4Km 5分	曾我十郎五郎首塚	
6Km 10分	ぶどう狩り (8月下旬~)	
5.8Km 10分	石畳	清流園
1.4Km 3分	清流園	弓削神社
1Km 3分	桃狩り (7月下旬~)	
5Km 10分	河内屋根付橋	
10Km R56 15分	川中三島神社	
~25分	ぶどう狩り (8月下旬~)	



児童館	100m 2分	商いと暮らし博物館	200m 4分
本芳我邸・大村家	150m 3分	木蠟資料館上芳我邸	
場	700m 15分	フレッシュパークからり	

(見学所要時間2~3時間)



- 観光農園**
- いちご狩り (4月下旬~5月上旬)
 - 桃狩り (7月下旬~8月中旬)
 - 梨狩り (8月上旬~9月下旬)
 - ぶどう狩り (8月下旬~9月下旬)
 - りんご狩り (9月上旬~11月上旬)

旅館 土産品店 喫茶・食事 伝統工芸

大洲市

県の西部に位置し、ひじかみ 肱川流域一帯の中心都市である。市域は肱川沿岸の盆地帯を中心に、四周には五〇〇五〇の丘陵をめぐらし山林地帯に囲まれている。気候は温暖だが地勢の関係から秋から冬にかけて霧が多く、独特の叙情的な景観を見せる。

このあたりはかなり古くから開拓が進んでいたらしく、高山のメンヒル、魚梁瀬山のドルメンやストーンサークルなども残っている。奈良時代にも寺院などが建立され、平安初期には喜多郡は矢野・久米・新谷の三郷に分かれ、久米郷の大洲が政治・経済・文化の中心地となっていた。

鎌倉時代には河野氏の支配下にあつたが、元弘元年(三三)、下野の宇都宮豊房が伊予国守護に任ぜられてここに大洲城を築いた。戦国期を経て元和三年(六三)、米子から加藤貞泰が六万石で転封され、以来城下町として発展し、加藤氏は明治維新を迎えるまで、一三代二五二年間つづいた。

明治二二年に行われた町村制によって、大洲町と平野・南久米・菅田・大川・柳沢・新谷・三善・粟津・上須戒の九村が誕生したが、昭和二九年九月、これらの一町九村が合体し、県下第七番目の大洲市となった。

主要産業は農業・林業で、農業は米・麦を中心にカンシヨ・葉タバコが耕作され、果樹

栽培・酪農・養蚕もさかんである。林産物としては古くから伊予の切炭として木炭が有名であつたが、現在ではアカマツ・杉・ヒノキなどが伐り出されている。江戸時代以来の伝統をもつ、製糸工業も行われる。

見どころとしては大洲城跡や中江藤樹邸跡如法寺・八幡神社などの旧跡・古社寺、民俗資料を展示する大洲市立博物館(二〇〇八・九・三・二・四・四・一〇七)、明治洋風建築の大洲商業銀行を再整備したおおず赤煉瓦館(二〇〇八・九・三・二・四・一・二八)があり、森山のサザンカと東宇山のハルニレは、県の天然記念物に指定されている。また、肱川の支流矢落川の上流部(市内田処皆地)にはゲンジボタル(県指定天然記念物の発生が見られる)。

おおず 大洲城跡 (城山公園)

市内大洲。伊予大洲駅下車15分
N33°30'22" E132°32'37"

伊予大洲駅の南約一、肱川の右岸に残る平山城の跡。鎌倉初期、河野通信が砦を構えたのが始まりというが、本格的な築城がなされたのは元弘元年(三三)、伊予国守護職に任ぜられ、下野(栃木県)から入った宇都宮豊房が、大津(天洲)の旧称を本拠としてからのこと。宇都宮市は代々大津に居城したが、八代豊綱の室町末期、土佐高知県の長宗我部元親に味方して、湯築(松山市)城主河野忠通・通宣父子と戦つて敗れ、滅び去つた。

その後、城主は水禄二一年(六六)、大野直之(宇都宮氏の家臣)、天正一二年(五六)、河野通直、天正一五年、戸田氏賢、文禄四年(五九)、



藤堂高虎(宇和島に居城して兼領)、慶長一四年(二〇九)、脇坂安治と替わり、元和三年(二六七)、加藤貞泰が伯耆(鳥取県)米子から大洲六万石に封ぜられて入城し、加藤氏が三代伝えて明治維新に及んだ。この間、藤堂、脇坂氏の時代に、近世山城としての構えが整えられたらしい。地名の大津は、加藤氏二代泰興(月窓)の時、今の大洲と書かれるようになった。

現在城跡は城山公園とされているが、本丸、二の丸跡や、堀・石垣などをよく残しており、県の指定史跡になっている。数棟の楼閣も現存し、本丸跡の高欄櫓と台所櫓、肱川河畔の二の丸跡に建つ芋綿櫓、三の丸西の門近くの南隅櫓が国の重要文化財に、城下の台所が県の文化財にそれぞれ指定されている。

園内には桜が多く、肱川の清流を見下ろす眺めもよい。大洲の町は、短冊割りの街路や低い家並みに、城下町時代の面影をよく残し、『伊予の小京都』などともよばれている。NHKのテレビ小説「おはなはん」の舞台になったこともある。

④ 大洲城櫓四棟

高欄櫓は二重二階、屋根本瓦葺き、総塗籠、白漆喰仕上げ。優美な縁や高欄を設け、一階南西隅に石落としがある。江戸末期(一九世紀前半)の再建。台所櫓も江戸末期の建築で、二重二階、屋根本瓦葺き、白漆喰仕上げ。二階に、城郭建築の初期の様式である唐様の華頭窓を開けている。芋綿櫓は二重二階、本瓦葺き。天保一四年(一八四三)、再建の棟札がある。



中江藤樹邸跡

市内大洲。伊予大洲駅下車
17分
N33°30'09" E132°32'31"

大洲の町の西寄り、国道19号からすこし南へ入った、県立大洲高校の構内にある。近江

南隅櫓は二重二階、本瓦葺き、装飾的なたくりが目立つが、内部に鉄砲挟間の隠し塗りなどがある。棟札が現存し、明和三年(一七六六)の造立であることがはっきりしている。
県指定文化財の城下台所は木造二階建てで、桁行一
九・八尺、梁間七・九尺、屋根切妻造、本瓦葺き。
元禄五年(一六三三)に画かれた大洲城絵図にも載っており、それ以前の創建とみられている。

聖人中江藤樹が、大洲藩主加藤貞泰に仕えた時期を過ごしたところで、県の指定史跡になっている。

藤樹は名を原、字を惟命、通称与右衛門といい、慶長一三年(一六〇六)、近江国高島郡上小川(現滋賀県高島郡安曇川町上小川)に生まれた。のち、高島城主であった加藤貞泰の転封にしがたがって、祖父の吉長とともに近江をあとにして伯耆米子へ移り、一〇歳の時、伊予大洲に入住した。一五歳で元服して独立。鉄砲町(現邸跡の場所)に屋敷を構え、その年七五歳で病没した祖父のあとを継いで、禄一〇〇石で加藤家に仕えたが、寛永一一年(一六三四)、二七歳の時、郷里の近江に一人残る老母を想って脱藩。近江へ帰住して儒学を修めた。慶安元年(一六五〇)没。わが国陽明学の祖とされている。著書に『翁問答』『鑑草』『大学解』などがある。

現在邸跡には、藤樹が使った「中江の水」とよぶ井戸が昔のままに残っている。ほかに、滋賀県安曇川町の藤樹書院跡から分植された藤樹遺愛のフジ、一〇〇石取りの武家屋敷を復元した至徳堂などがある。

中江藤樹先生と大洲



愛媛県指定史跡中江藤樹邸跡

県教育委員会指定 昭和23年10月28日

◆ 中江藤樹先生の生涯

先生は江戸初期の儒学者で、わが国最初の陽明学者である。名は原、通称は与右衛門、字は惟命、号は願軒・暁軒という。居宅に藤の大樹があったので藤樹先生と呼ばれ、みずからも学舎を藤樹書院と名づけた。世人は尊信して近江聖人と称した。

近江国高島郡小川村（滋賀県高島郡安曇川町）の農家に生まれ、9歳の時から祖父徳左衛門吉長に養われ、元和3年（1617）加藤貞泰公が米子から大洲へと国がえのおり、祖父に従い大洲藩に仕えた。半年にして風早（北条市）に移ったが、3年の後再び大洲に帰った。

祖父に与えられた樹形（大洲小学校地）の邸に住み、元和8年（1622）15歳で元服の後は、別居して鉄砲町のこの地に移った。禄百石をうけ郡方をつとめる。父徳右衛門吉次は先生18歳のとき小川村に没した。寛永11年（1634）27歳のとき郷里に独居する母への孝養のため致仕を願い出たが許されず、ついに官を捨て小川村に帰り、以後母に仕えて学問と教育に専念した。先生を慕い大洲より近江に参ったもの30数人という。慶安元年（1648）秋、41歳にして病のため世を去る。

「翁問答」、女子のための教訓書「鑑草」は有名な著書である。

◆ 藤樹先生の思想

11才のとき『大学』の文中で「身ヲ修ムルヲ以テ本ト為ス」を読み感激し、万人に通ずる学問の樹立を志したといわれる。「孝」をすべての人間に共通する道徳原理と考えた。しかも、この「孝」について単に子の父母に対する関係において考えたのではなくて、天地を貫く大道として説いた。また、王陽明の説に接してからは、「知行合一説」「致良知」に深く感じ、実践倫理を重んじ、人間は日々反省し、日々小善を積んで道としなければならず、また、孝は良知に等しいと説いた。

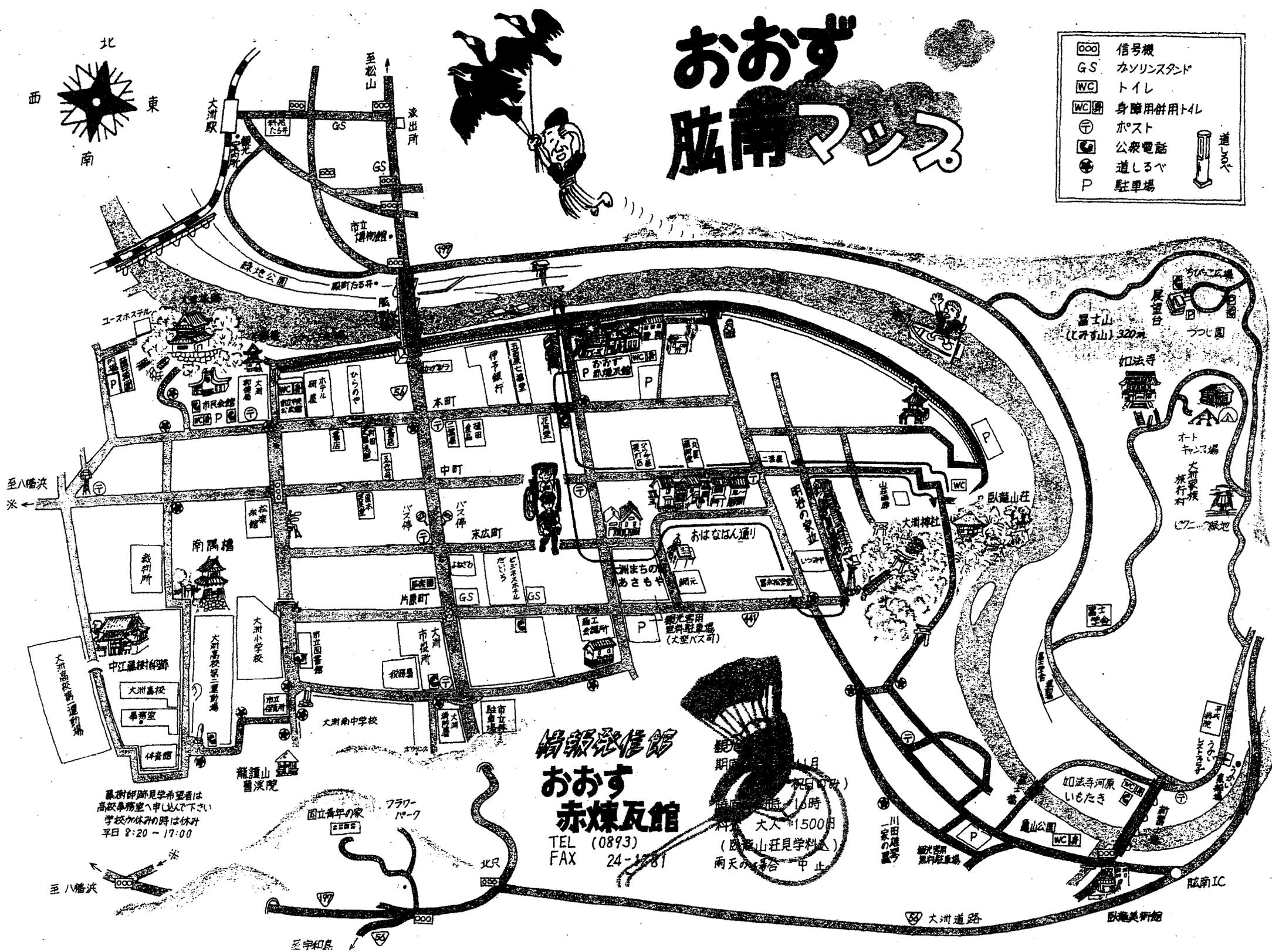
◎ 思想のことば

「孝」 このたからは天にありては天の道となり、地にありては地の道となり、人にありては人の道となるもの也、元来、名はなけれども、衆生におしえしめさんために、むかしの聖人、その光景をかたどりて孝となづけ給う。〔略〕
孝はたとえば明なる鏡のごとし、むかうものの形と色によって、鏡のうちの影は、しなじなかわれども、あきらかにうつす鏡の体はおなじもの也 〔略〕
人倫にあいまじわる事は、千々よろづにしなかわれども、愛敬の至徳は通ぜざるところなし。 (翁問答)

「良知」 聖賢のごとく知恵のあきらかならざるを愚痴とす。聖賢のごとく才能の達せざるを不肖とす。愚痴不肖といへども良知良能あり、その良知良能をうしなはざれば愚痴不肖も善人の徒なり 〔略〕
本心の良知をうしなうものをおしなべて悪人とは言ふなれ (翁問答)

おおす 肱南マツル

-  信号機
-  GS カソリンスタンド
-  WC トイレ
-  身障用併用トイレ
-  ① ポスト
-  ② 公衆電話
-  ③ 道しるべ
-  P 駐車場



絹製発信館
おおす 赤煉瓦館
 TEL (0893) 24-1281
 FAX 24-1281
 期間 11月 祝日可
 時間 午前10時 - 午後16時
 料金 大人 ¥1500
 (臥龍山荘見学科込)
 雨天の場合 中止

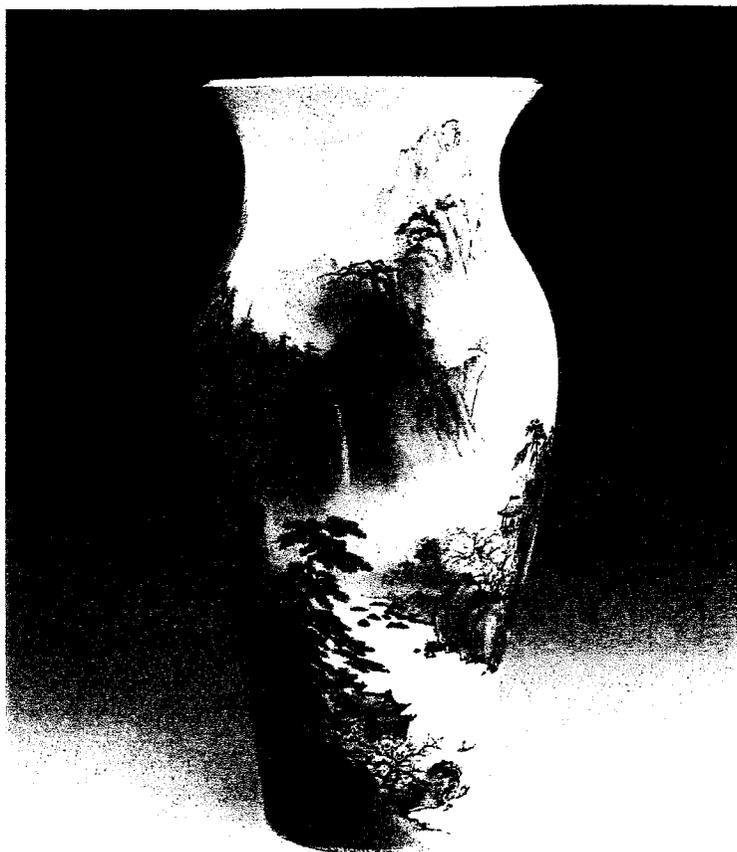
藤樹御跡見学希望者は
 高校事務室へ申し込んで下さい
 学校が休みの時は休み
 平日 8:20 - 17:00

約400年の伝統に育まれた

国の伝統的工芸品指定の砥部焼

●砥部焼の歴史

砥部焼は磁器の焼きものですが、古くは陶器の焼きものでした。元文五年(1740年)の記録「大洲秘録」に「陶茶碗之類ヲ造り出ス「トベヤキ」と云」とあり、この頃すでに陶器が生産されていました。唐津や有田、朝鮮半島から技術が伝わったものと言われています。安永四年に大洲藩の加藤三郎兵衛が藩財政を助けるため磁器の生産を考え、砥部の門田金治と杉野丈助に磁器生産を命じました。丈助は五本松村に登窯をつくり試作した後、安永六年三月、本焼をします。しかし釉薬がとけず失敗、つづいて2回目も失敗。丈助は試行錯誤をかさね、行きづまってしまいます。その時、筑前上須恵窯から、砥部に移住していた信吉から、失敗の原因は釉薬の不良だとおしえられます。丈助は筑前から釉薬を持ち帰り、安永六年十二月、磁器の焼成に成功しました。その後も改良がかさねられ、文化十年(1813年)向井源治が原料陶石・川登石を発見。井岡太蔵は煉瓦(とんぼり)で築いた窯や陶石を砕く大水車も導入しました。明治八年には良質の原料陶石・万年石が発見され、型を使った絵付の技法や機械ろくろの使用などの技術革新がつづきます。清楚な白磁の温かい肌に興須絵の深い味わいと手作り手書きの格調高さが砥部焼の特色です。



砥部陶磁器史略年表

年	事 項
700	文武4 大下田(原町)にて須恵器が焼かれる。
747	天平19 正倉院文書に「伊予砥」が課徴された記載あり。
1740	元文5 大洲秘録に砥部焼の名称があり、陶器が焼かれていた。
1775	安永4 大洲藩主加藤泰侯が、砥石屑を用いて磁器創業を命じる。
1777	6 杉野丈助が磁器の焼成に成功する。 大洲藩の経営であった上原窯を門田金治が譲り受ける。
1813	文化10 向井源治が五本松に窯を開く。
1818	文政元 向井源治が川登陶石を発見する。
1825	8 亀屋庫蔵が、肥前より錦絵の技法を伝える。
1857	安政4 唐津役所(新谷)、瀬戸物役所(大洲)が設置される。
1875	明治8 万年陶石が発見される。
1878	11 五松斎が肥前より陶工を招き、型絵染付が伝わる。
1885	18 砥部焼の清国(中国)への輸出が始まる。
1888	21 下浮穴・伊予両郡の陶磁器同業組合が設立される。
1890	23 愛山窯で淡黄磁を焼き始める。
1893	26 シカゴ世界博で淡黄磁が入賞する。
1906	39 神戸の貿易商・池田貫兵衛が砥部焼の直輸出を始める。
1915	大正4 村立砥部工業徒弟学校が設立される。
1953	昭和28 柳宗悦、B・リーチ、浜田庄司が来町し、砥部焼の指導をする。
1963	38 県立窯業試験場が五本松に移転される。
1976	51 砥部焼が国の伝統的工芸品の指定を受ける。
1984	59 砥部焼まつり始まる。
1989	平成元 砥部焼伝統産業会館開館

宿泊部屋割り表

部屋 No

氏名 (敬称略)

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

